

1954年に太平洋マーシャル諸島ビキニ環礁で行われた水爆実験を巡り、被ばくした「第五福竜丸」以外の船員への影響について、国が追跡調査に乗り出す。実験から60年余。放射線の影響を疑われながら、国が

ビキニ実験遭遇 「第二幸成丸」

ら事実上放置されてきた船員やその家族は「どうしてもっと早く調べなかったのか」との思いを強くする。一方で「後世に役立つようしっかり調査してもらいたい」と要望する声も上がった。(1面参照)【高橋慶浩】

調査「後世に役立てて」 遺族

「福島の原発のごとくもあるし、ちゃんと調べてもらって後々に役立つ資料になってほしい」。高知県室戸市のマグロ漁船「第二幸成丸」の乗組員としてビキニ実験に遭遇し40歳で亡くなった寺尾良一さんの妻政子さん(71)は、慎重に言葉を

選びながらそう話した。幸成丸は初回の水爆実験が行われた54年3月1日には日本と危険区域の中間付近を航行し、同月27日、4月7日と続いた実験時には近くの海域にいた。漁を終え帰国したのは4月15日。福竜丸の被ば

くは既に大きく報じられたおり、幸成丸も魚を廃棄処分したが、乗組員は船上でその一部を食べていた。良一さん政子さんは良一さん政子さんの10代。12年後の66年12月に結婚したが、その生活は10年余で唐突に終わった。77年2月、良一さんは自宅で突然血を吐き、救急車で高知市内の病院に運ばれた。「亡くな



寺尾政子さん

た。良一さんはビキニの体験を家族に話さず、仕事は魚の行商に変えていた。政子さんは「関係に疑問を持ち始めたのは、被災者の調査に携わる知人から聞いた。だが、当合わせがあった一昨年。「水爆がなかった男の子2人を抱え、疑問を封印。生命保険の

「国の立ち上げ遅い」

魚ばかり検査し

当時24人と報じられた第二幸成丸の乗組員のうち今も生きているのは3人だけという。寺尾さんの中学の同級生と一緒に漁師を始め、幸成丸に乗っていた室戸市の久保尚さん(78)は「何で今ごろになって」と憤る。「自分たちは当時若くて被ばくというものが頭になかった。チェルノブイリや福島の原発事故があって『どういうもんか』となるわけやから。国が調査を立ち上げるのが遅い。60年やもね。ほとんど記憶もないもんね。当時の日本は米国の言いなりだった(ので十分な対応をしなかった)のが一番悔

「魚ばかり検査し」
やはり幸成丸の乗組員だった高知市の桑野浩さん(82)は「本来ならビキニの海域に行った漁師は福竜丸のように1年くらい強制入院させないといかないはずだった。なのに当時、魚ばかり検査して人はあまり検査されなかった。『どうして早死にしなければならぬのか』と悔し涙を流して死んでいった人もいる」。

自身は同僚の早過ぎる死に直面し、被ばくの後遺症に1ル依存症になって聞き取り調査してほしい」と強被災事態を長年市民団体「太平洋事務局長で宿毛市正寿さん(69)は「かのぼれば追跡調査分かるはず」と施を訴えた。



1954年のビキニ環礁での水爆実験に遭遇するより前に撮影されたという「第二幸成丸」の乗組員ら。左端が故・寺尾良一さん、右端は桑野浩さん—桑野さん提供